

何でも読もう会

書物名	『疑惑』 芥川龍之介	開催 日時	2023.8.7	出席者	6名
<p>芥川の短編を読み続けている。</p> <p>彼は古今東西の作品をベースに、それを独自の目線と感性で独特の作品に仕上げる。この作品には原典はあるのか？と思えるほど創作的に仕上がっている。</p> <p>明治中期の濃尾大地震が話の舞台。大きな柱の下敷きになり身動きできない若い妻と助けられずに途方に暮れる夫。夫が最後に選んだのは瓦で妻を打ち殺し、業火の苦しみから妻を解放するという悲惨なもの。</p> <p>ここまではあり得る話だが、地震が納まり妻の死んでのち彼の心に疑念が生じる。ここからが面白い。</p> <p>ストーリーはある実践倫理学者が寄宿している岐阜の旧家の一室に、夜分に突如現れる訪問者の一人語りである。この訪問者が先述の夫である。大地震のこと、妻殺害のこと、動機のこと、その後の再婚話のことなどを語り続ける。</p> <p>この訪問者の様子が何となくあやしい。取り次ぎもなく現れたり、床の間の「楊柳観音」を気にしたり――。訪問者の正体を巡って、色んな推測が飛んだ。</p> <p>圧巻は、殺された若妻には身体的欠陥があったと夫が言うのだが、文章はその後「以下八十二行省略」と何が欠陥か書いていない。これは検閲か出版事情なのかと思ったら、作者が最初からこうしたようだ。こんな書き方もあるのだと大議論になった。</p>					